

玉

(能)

シテ 藪 俊彦
葛 ワキ 苗加登久治

間炭 哲男

大鼓 田中 一義
小鼓 多田 順子
笛 江野 泉

後見 島村 明宏
松田 若子

地謡

米島 和秋 渡邊 茂人
岩井 嘉樹 渡邊 荀之助
木谷 哲也 広島 克栄
山崎 健 佐野 弘宜

休憩 二十分

経

(仕舞)

政

クセ

田屋 邦夫

地謡

藪 克徳
渡邊 茂人
佐野 玄宜
木谷 哲也

酢

(狂言)

薑

酢売能村 祐丞

薑売炭 光太郎

後見 山田 讓二

融

(能)

シテ 高橋 憲正

ワキ 平木 豊男

間 清水 宗治

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒 充彦
太鼓 大橋 紀美
笛 室石 和夫

後見 佐野 由於
福岡 聡子

地謡

高野 秀幸 佐野 玄宜
浅谷 之信 高橋 右任
笠間 啓 島村 明宏
松本 博 藪 克徳

能 玉 葛 (たまかずら)

初瀬詣でを志す諸国一見の僧(ワキ)が小舟に棹さして初瀬川の急流を上る女(前シテ)に出会います。女はいにしえを慕い、寄る辺ない寂しさに泣き馴れた様子ですが、僧の言葉に気を取り直して時雨に染まる紅葉の夕景色を眺め、御堂を拝した後、僧を二本の杉に案内します。そこは夕顔の忘れ形見玉葛と侍女の右近が、夕顔の死後二十年近くを経て再会を果たした場所でした。その間の筑紫暮らし以来の辛酸は、思い出すたびに女を涙にくれさせます。その女こそは玉…と名乗りさし、女は弔いを頼んで消えました(中入)。僧が弔うところへ再び現れた玉葛の幽霊(後シテ)は正気をなくした体です。恋いわたる玉葛の人生は母恋いの後も何かと恋の憂き名を流し、それを思うと心は乱れ髪のように結ばれます。しかし恋を祈る場所初瀬で僧と出会えたことが転機となり、恋する女の狂おしい妄執を隠さず懺悔し切ることで、玉葛の心は玉のように澄み、長い夢路から覚めました。

狂言 酢 薑 (すはじかみ)

和泉国の酢売りと摂津国の薑(生薑のこと。天正本「辛皮」は山椒)売りが都へ出て、商う場所を争って口論になります。商人の家系を互いに誇る二人は、売り物の「酢」と「辛」を織り込んで、秀句(今いう洒落)の応酬に興じつつ、これが延々続くうちには、相手の利口を認め合い、笑い交わしてめでたく和解。「狂言」の称の本義はこのような言葉遊びにあるのでしょうか。その観客も、秀句を聞き分ける耳を持つかと試されているのです。

能 融 (とおる)

東国方から出た僧(ワキ)が都は六条河原の院に来てみると、汐汲みの老人(前シテ)が現れて塩竈の浦の風情を懐かしむ様子です。ここは洛中、汐汲みとは意外ですが、老人にいわせると、融の大臣が塩竈の浦に模した庭園ゆえに浦人を汐汲みと称して当然です。折から中秋の名月が出ました。往時の遊舞を思い返ししながら、老人は河原院に移された塩竈の浦のいわれを語ります。風景模写というこの壮大な風流を、大臣亡き後は相続する人もなく、荒れまざる一方です。昔が慕われてならないと嘆いた老人は、求めに応じて都の四方を見はるかして僧に名所の数々を教え、興に乗じて汐汲みの業を披露したかと思うと、汐曇りに紛れて姿を消します(中入)。やがて僧の夢に現れた往時の融(後シテ)は、八月十五夜の月下を晴れやかに舞い遊びます。河原院の栄花を心に復しつつ、今いる月宮殿を重ね見せるかのようです。夜明けに月光が薄まるのと共に融は面影を残して昇天します。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十一年十月六日(日)午後一時始

(能) 敦 盛 (狂言) 呂 蓮 (能) 女郎花